



あるじでえ

No.28

世田谷区教育委員会 民家園係
〒157 世田谷区喜多見5-27-14

◎次大夫堀公園民家園

☎03(3417)8492

◎岡本公園民家園

☎03(3709)6959

平成8年2月1日 発行

じゅん ぎょう ぶつ 巡 行 仏

I はじめに

○ お寺やお堂に祀^{まつ}られている仏菩薩の像や掛軸を、ある一定の期間村にお迎えして、各家々を順番に廻しながらお祭りする習俗があります。そうした習俗のことを仏様の「御巡行^{ごしゅんぎょう}」とか「お巡り^{めぐり}」と呼んでいます。

お迎えする巡行仏（民俗学では遊行^{ゆぎょうぶつ}仏と呼ぶ場合もあります）にはお不動様、観音様、お地蔵様、お大師様（弘法大師）などがあり、全国各地で行われてきた習俗です。しかしながら他の習俗と同様近年では、仏様の御巡行も次第にその姿を消しつつあります。

○ 世田谷でもかつては農家を中心に、各地域で御巡行が行われていました。今回は世田谷の巡行仏の中から、喜多見不動堂のお不動様、奥沢浄真寺の珂碩^{かせきさき}様、用賀無量寺の観音様について紹介いたします。

II 喜多見不動堂のお不動様

成城4丁目の野川沿いにある不動堂は明治9年に建立されました。中で祀られている不動像（残念ながらこの不動像は数年前に盗難に遭い、現在行方不明のままです）は明治の初め頃、多摩川大洪水の時に上流から喜多見河原へ流れ着いたと伝えられています。

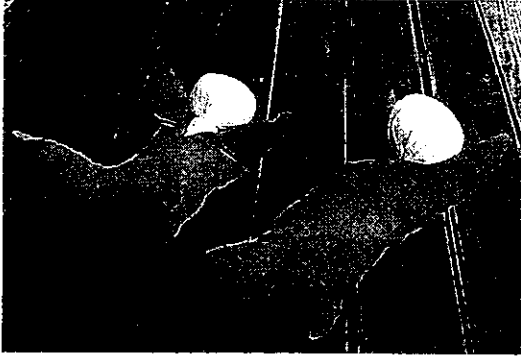
多摩川に沈んでいたお不動様を地元の人達が拾い上げ、背負って成田山新勝寺^{しんしょうじ}に運び、開眼供養（仏像や仏画に魂を入れるための儀式）を行ってもらったのだそうです。成田山新勝寺からは真言講^{しんごんこう}という講名をもらいました。

講員や信者は喜多見以外の地域にもいましたが、お不動様の御巡行^{ごしゅんぎょう}が行われたのは喜多見だけでした。お厨子^{ずし}に入れられたお不動様は正月に不動堂を出発し、約2ヶ月間かかって喜多見の各家々を泊まり歩いたのです。

お不動様をお迎えした家ではお厨子を床の間に安置し、準備しておいた御馳走をお供えして、家族の者がお参りします。そしてその夜一晩はお不動様をそのまま泊めるのです。このことを「お不動様のお宿をする」と言っていました。

当時女の子のいる家では、おばあさんや母親が「サル」と呼ばれる人形の作り方を女の子に教えました。そして女の子自身が作ったサルに自分の名前を書いてお厨子に吊り下げます。こうすると勉強が良くなるようになるとか、裁縫^{さいほう}が上手になると言われていたのだそうです。

サルは頭の大きさが2cm、体長が10cm程の小さな人形で、中には綿を入れて作りました。



サル：これは体長40cm程で、女の子が遊び相手としていた物。

翌朝には次のお宿をする家の人が迎えに来て、お厨子を背負って帰ります。お宿をしている家から隣の家へ、「明日はお宿をさせてくれますか。」と聞きに行きます。お宿をするのは希望する家だけだったので、断られると次の家に頼みに行きません。しかしながら当時は農家が多く、信仰心の厚い人が多かったため、ほとんど断られることはなかったそうです。

Ⅲ 奥沢浄真寺の珂碩様

浄真寺は奥沢7丁目にある浄土宗寺院で、今から300年以上も前の延宝6年(1678)に建立されました。開祖(創立者)は珂碩上人と言う人で、今でも珂碩様と呼ばれて親しまれています。

その珂碩上人の像が昭和16年頃まで、奥沢中を巡行していました。

像は2体あって、1つは珂碩上人が42歳の時に自ら作ったと伝えられている像です。もう1体は72歳の時の珂碩上人を写したと言われている等身大の立像です。

この2体の像が1年交替で奥沢の家々を、その宗旨しゅうしに関係なくすべて廻っていました。古老からの聞き伝えによると、昔奥沢おくびょうに悪病あくびょうが流行ったことがあり、その時に

珂碩様の御巡行が始まったのだそうです。

珂碩上人の像は4人の若者わかに担がれて御巡行に出掛けますが、その横には世話人たたが1人付いていて、手に持った鉦かねを叩きながら念仏となを唱えていました。浄真寺からも僧侶が1人付いて廻り、行く先々でお経せっぽうを上げたり、珂碩上人に関する説法せっぽうをしたりしていたそうです。

珂碩様をお迎えした家では供物くもつ(オモリモノと呼ばれました)として、混ぜ御飯や団子を供えました。お参りに集まって来た近所の人達にもそれらを振る舞い、子供達にはお菓子を配りました。

珂碩様は3日間程かけて奥沢中を廻りましたが、お宿をする家は寺の世話人の家など数軒だけで、すべての家に泊まっていたわけではなかったようです。

珂碩様の像にはこの2体の他にも、小さな座像がありました。この像も珂碩様の分身ぶんしんと言われ、お厨子に入れられており、多摩川沿いの村々を御巡行していました。

この像の御巡行は青物講という、浄真寺に野菜を納めている農家の人達によって作られた講を中心に行われていたそうです。

世田谷では喜多見・大蔵・岡本などで、珂碩様の御巡行の話聞くことができます。

喜多見には調布市入間の方から送られてきて、各家々を順番に泊まり歩きました。お宿をする家ではお供え物をしたり、喜多見不動堂のお不動様の時と同じように、女の子の作ったサルの人形を吊り下げたりしていました。

喜多見地域では、珂碩様はお産の神様として信仰されていたようです。

Ⅳ 用賀無量寺の観音様

無量寺は用賀4丁目にある浄土宗寺院で、文禄元年(1591)に開山されています。

本堂横には観音堂があり、十一面観音じゅういちめんかんのんが祀られています。観音堂げんろうくは元禄年間（1688～1704）に第4世年替上人ねんよしやうにんによって創建されたと伝えられています。

12年毎に巡ってくる午年うまに御開帳ごかいちやうが行われますが、それは観音様の浄土である補陀楽浄土ぶたらくじやうどが南方にあるとされていて、午が南の方角に当たることにちなむものです。

この十一面観音菩薩像えんぎの縁起えんぎに関しては、次のような言い伝えがあります。

今から400年以上も前になる天正年間てんしやう（1573～1591）、品川よりきにはまの寄木浜という海岸で、漁師の網に掛かって引き揚げられたのがこの十一面観音像でした。



十一面観音の分身で御巡行に使われる

どういう経緯いきさつがあったのかはわかりませんが、その後この観音像はある行商人によって、用賀に住んでいた高橋六(右)衛門という人の元へ持ち込まれました。

一方別な説によれば、2代目六(右)衛門が品川の浜辺を歩いていたところ、漁師の

網に掛かった十一面観音像が浜に打ち上げられていました。そこで六(右)衛門はその観音像をもらい受け、自分の家で祀ることにしたと言うのです。

それからその後、観音様が六(右)衛門の夢枕ゆめまくらに立ち、村人皆でお祀りするようにとお告げをしました。六(右)衛門はお告げに従って十一面観音像を無量寺に安置してもらい、皆で祀るようになったということでした。

さて、この十一面観音像には分身（現在は3体ですが、多い時には8体ありました）があって、各地域に迎えられては家々を一晩ずつ泊まり歩きました。これを観音様の御巡行と言います。

御巡行が行われていた地域は広く、かつては野良田村・瀬田村・岡本村・大蔵村・宇奈根村・横根村・新町村・北沢村・船橋村・祖師ヶ谷村・八幡山村・赤堤村などの世田谷区内ばかりではなく、調布市や狛江市などでも観音様をお迎えしていたのだそうです。

しかし時代とともに御巡行は行われなくなり、現在ではわずかに桜地区さくらぎ（桜木・満中まんちゆう在家）に伝承されているだけとなっています。

桜木と満中在家は世田谷区の中心部に位置し、旧世田谷町の区域に含まれていました。現在両地域で17軒の家々が観音様の御巡行を行っています。



観音様をお迎えに来た世話人

かつては各村々に^{かんのんこう}観音講が組織され、それぞれの講に世話人がいたそうですが、桜木と満中在家に観音講という名称は伝えられていないようです。ただし、世話人は桜木と満中在家にそれぞれ1人ずついます。世話人は代々同じ家が務めることになっています。



お宿に迎えられた観音様

毎年8月18日になると桜木と満中在家の世話人が2人で無量寺へ行き、観音様を迎えて来ます。30年程前までは3人で迎えに行き、観音様の入ったお厨子を長い棒で担いで来ていましたが、その後リヤカーで運ぶようになり、近年は車で迎えに行くようになりました。

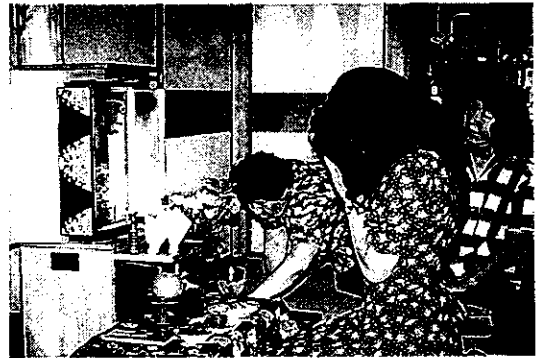
8月18日にはまず、満中在家の世話人の家でお宿をすることになっています。戦前までは満中在家の家々を廻ってから、桜木の方を廻りました。桜木のほうでもまず、世話人の家でお宿をすることになっています。

戦後はお宿をするのを止めた家があったり、新たにお宿をするようになった家が加わるなど、御巡行の順番に少し混乱が生じたため、満中在家と桜木に関係なくお宿の順番が決められました。

お宿をする家ではその日の夜と次の日の

朝および昼に、それぞれ^{しょうじんりょうり}精進料理を作って観音様にお供えます。昔は近所の人達を招いてお接待していたこともあったのだそうです。

一晩お宿をしたら翌日の夕方に、次のお宿の順番になっている家に連絡して、観音様を迎えに来てもらいます。以前はその家にわざわざ伝達に行っていたそうですが、今では電話で連絡しています。



お宿に迎えられた観音様

こうしてすべての家がお宿を務め終わったら、お迎えの時と同じく世話人2人が無量寺へ、観音様をお返しに行くことになっています。

言い伝えによれば、この観音様は^{えきびょう}疫病神です。戦時中食糧難だったために御巡行を中止したところ、^{あた}辺り一帯で病気が流行ってしまいました。「これは観音様をお迎えしないからだ。」と、誰言うことはなしにもう一度御巡行を始めました。するとその流行病はピタリと止んだそうです。

またこの観音様は、子育て観音としても信仰されています。

参考文献

最上孝敬「武相の巡行伝について」
『西郊民俗』第57号 昭和46年

世田谷区教育委員会

文化財資料調査員 高見寛孝